

『古事記』の所伝のなりたちと漢籍

——仁徳天皇条の所伝をめぐって、その(一)——

榎 本 福 寿

一 はじめに

小稿は、『古事記』の下巻のはじめに位置する仁徳天皇条の所伝をとりあげ、そのなりたちについて検討をくわえたささやかな試みである。なりたちとは、ここに、広義、所伝の構成を意味する。仁徳天皇条の所伝をはじめとして、これ以降、あたかも下巻を特徴づけるかのように、この構成のうちに、漢籍にまなんだ知識のあらわれが著しい。わけても仁徳天皇条の各所伝は、その構成に漢籍の知識がおおきく参与するかたちでなりたっている。それぞれについて、漢籍を逐一つきあわせながら検証をこころみる。同じこころみの別稿^{註1}につづく、これは第二稿である。

二 石の日売の嫉妬をめぐる所伝のなりたち

別稿にとりあげたのは、仁徳天皇条の冒頭の所伝、すなわち天皇が課役の免除をとおして人民の貧窮を救済する

という所伝である。この所伝は、最後を、仁徳天皇の時代を「聖帝世」というように儒教の理想的な世としてたててしめくくる。所伝の筋だてもまた、儒教の考えをもとになりたつが、さらには、その記述にも、漢文としての整いをめざす志向が著しい。

冒頭の所伝には、こうしてそのなりたちの根幹に漢籍の知識がふかく参与しているが、さて、これにただちに近づくのが、太后、石の日売の嫉妬をめぐる所伝である。それは、次のような書きだしではじまる。

其太后石之日賣命、甚多^二嫉妬^一。故、天皇所^レ使之妾者、不得^レ臨^二宮中^一。言立者、足母阿賀迦邇嫉妬。(下2ウ)^{注2}
いきなり石の日売の嫉妬をことさら強調する。それが太后の人となりであるといえ、それまでだが、なおやはり、唐突の感は否めない。しかも、右の一節につづく黒日売をめぐるくだりは、たしかに、「畏^二其太后之嫉^一」というように、太后の嫉妬を畏れる黒日売の、その本国への逃避行を契機として展開するけれども、「嫉妬」ないし「嫉」という語のあらわれは、右に挙げた例がその全てである。すなわち、所伝のはじめのくだりにそれらは偏在しているにすぎない。あとは、たとえば「太后聞^二是之御歌^一、大忿」(黒日売の登場するくだり)「太后大恨怒」(八田若郎女の登場するくだり)などのように、太后は、実際に登場する場面において、むしろ忿怒をあらわにする。この忿怒は、もとより嫉妬がかたちをかえたあらわれであろうが、そうしたあらわれ自体、特徴であると同時に、いちじらしい偏りでもある。この偏りについては、後に言及する。

さて、この所伝は、太后が天皇をめぐるおのれに對立する女性やさらには天皇自身に對して忿怒をあらわにするというように、冒頭にその異常なまでの嫉妬を強調するとおりの展開をみせる。けれども、その展開のなかで、太后は、かならずしもつねに主人公の立場にたつわけではない。確かに、黒日売は太后の嫉妬を畏れて本国に逃げかえるし、この折、天皇は黒日売の船出を見おくって彼女を愛惜する歌をよむが、この歌をきいて、太后は大いに

忿り、黒日売を船からおろして徒歩でゆかせる。黒日売への恋慕のやみがたい天皇は、黒日売にあいに吉備へわざわざ出むくことになるが、このばあいでも、太后を欺く口実を設けるといったように、ことほどきように太后の存在が大きいことは、これは否むべくもない。けれども、そうして展開するそれぞれのくだりにしても、太后の登場には、天皇の好色がその発端ないし契機となっている。いわば、天皇の好色がまずあって、これが太后の登場を導きだしているというのが実態である。げんに、吉備への道行きからかの地での黒日売とのおうせ、さらには彼女との別離にいたるまで、これら一連の展開において、天皇こそその主役である。ここにまじえる歌にしても、三首が天皇の黒日売への恋慕をよんだものの、のこる二首が黒日売の返歌である。黒日売に対する執拗なまでの天皇の恋慕を主題とするかの観さえ呈する。ここに、太后の存在は、背後にはるか遠のいてしまっている。

黒日売をめぐるくだりは、天皇の帰京にさいして、黒日売がこれについて皮肉たつぷりによんだ歌をもつて幕をとじる。しかし、天皇の恋はそれでやむどころか、相手をかえて、なお一層激しいかたちでつづく。すなわち、八田若郎女に対する恋がそれで、

自_レ此後時、太后爲_レ將_ニ豊樂_一而、於_レ採_ニ御綱柏_一、幸_ニ行木国_一之間、天皇婚_ニ八田若郎女_一。(下4ウ)

太后の不在中の「婚」という、書きぶりはさりげないけれども、不在に乗じての、たぶん密通さえほうふつとさせるうえに、その実態は、「晝夜戲遊」という、これはまたこれで、中国のいにしへの暴君の桀紂を思わせる感蕩ぶりであった。この天皇の感蕩を聞き知った太后は、「大恨怒」り、御綱柏をすべて海になげ棄てて山代へと逃避する。

所伝は、こののち、逃避した太后と天皇との仲をとりなそうと懸命に努力する臣下の活躍へと移るが、右の限りについていえば、細かい点はともかく、筋立ての基本は、黒日売との恋をものがたるくだりとほぼ重なりあう。両

者の共通点を、便宜、表にまとめて次にしめす。

(一)		(二)		(三)		(四)		(五)	
黒日売	喚上	天皇のつよい愛情	大后、(二)を歌によって察知	大后の大忿	大后、徒歩で追歸す				
八田若郎女	婚	天皇の昼夜戯遊	大后、(二)を仕丁の言によつて察知	大后の大恨怒	大后、自ら身を引く				

黒日売と八田若郎女とのその出自の違いに應じて、「喚上」と「婚」というように、その扱いは明らかに異なる。

(四)以下の展開がそのそれぞれの扱いの延長上にあること、たとえば、黒日売を徒歩で追い歸すのは彼女が地方豪族の女でしかないからで、一方、八田若郎女のばあいでは、天皇にたいする抑制しがたい感情はそれとして、また別に、彼女が皇族(天皇の異母妹)であり、そのために、これはむしろ彼女にたいするはばかりや遠慮があつて身を引くにいたつたものというように捉えうる。たがいに對比してみたときに、そこに見出しうる双方の違いは、たしかに小さくはないけれども、それも、人やことの次第などの違いにともなう、その対応ないし対処の異なりではない。(一)～(四)の限りでいえば、継起的に展開する筋立てが、いわば天皇の好色を基軸に重なりあい、したがってそこにあらわす内容もまた、各項それぞれに、たがいにほぼ共通する。

三 天皇の好色

双方のくだりに共通する天皇像は、いわば一介の好色男でしかない。黒日売のばあいでは、大后の嫉妬を畏れ、本国へ逃げ帰ろうとして船出した彼女を、天皇は、はるかに望みみて、さながら愛惜の念おくあたわざるといったみれんがましい歌をよむ。さらに「欺_二大后_一」き、ひそかに彼女をその郷里にたずねるといったいれこみようである。

八田若郎女に対しても、「婚」というかたちをとるけれども、大后の不在中、恐らくその機に乗じてであらう、さきに言及したとおり密通さえそこにほうふつとさせる。^{注3} あまつさえ、その「婚」について、仕丁でさえ「天皇者、比日婚^ニ八田若郎女^ニ而晝夜戲遊」とそしめる。もともと、この仕丁の出身をわざわざ吉備国児嶋郡とことわることから推して、右につづく「若大后不聞^レ看此事乎、靜遊幸行」という仕丁の物いいは、あるいは同じ吉備国出身の黒日売を追ひ帰した大后に対する皮肉をふくんでいるかもしれない。かりにそうであったにしても、こと天皇に對しては、仕丁は、ことさらそしめる立場にはない。したがって、彼が天皇の八田若郎女との「婚」について評した「晝夜戲遊」ということばは、ほぼ顔面どおりうけとることができるはずである。

黒日売に対する恋にしても、また八田若郎女との「婚」はなおさらのこと、天皇のそれらへのいれこみようは、ほとんど常軌を逸している。とりわけ、仕丁の「晝夜戲遊」ということばにそくしていえば、たとえばかの夏の桀王の女色への耽溺に類する。劉向の『古列女伝』（卷之七）には、それについて次のように伝える。

桀既棄^ニ禮義^一、淫^ニ于婦人^一。求^ニ美女^一、積^ニ之於後宮^一。收^レ倡優・侏儒・狎徒、能爲^ニ奇偉戲^一者。聚^ニ之于旁^一、造^ニ爛漫之樂^一。日夜與^ニ末喜及宮女^一飲酒、無^レ有^ニ休時^一。

桀王の淫樂は、もちろん、夏の滅亡を招く異常なもので、右にとどまらないが、それはさておき、淫樂をものがたるには、一つの類型がある。すなわち、「日夜與^ニ末喜及宮女^一飲酒、無^レ有^ニ休時^一」というように淫樂が終日に及ぶというのがそれである。同じ『古列女伝』では、ほかに殷の紂王について「好^ニ酒淫樂、不^レ離^ニ姐己^一」^{注4}といい、酒池肉林の豪遊その他を述べたあとに「爲^ニ長夜之飲^一、姐己好^レ之」と伝える。幽王についてもこれまた同様で、「飲酒沉湎、倡優在^レ前、以^レ夜繼^レ晝」とある。こうした類型は、『古列女伝』の記述をとりいれて成る書紀・武烈天皇条（八年三月）の、その天皇の淫樂をものがたる箇所「日夜、常與^ニ宮人^一、沈^ニ湎于酒^一」というようにあらわれる。

仁徳天皇の、八田若郎女あいての「晝夜戲遊」が具体的にどのような内容であるのか、詳細は不明というほかないが、少くとも、それが右の類型を踏まえた表現であることは疑いを容れない。その点、そこに飲酒を想定することも不自然ではない。けれども、飲酒あるいは歌舞音曲などにも一切言及しない。類型によりながらも、天皇の乱行を、もっぱら女色にそくして、いいかえれば、所伝の、これ以前の黒日売への異常なまでの恋慕をうけて、その延長上にあらわしたものが、八田若郎女との「晝夜戲遊」にほかならない。

所伝は、かくて、仁徳天皇の好色に主題を狭く限定している。桀紂などの例のように、その暴君の一面として淫乱にふける、武烈天皇もその列につらなる、そうしたひろく為政者としての不適格を強調する類とは、あきらかに異なる。とはいえ、その「晝夜戲遊」が漢籍の類型——芸文類聚の分類では「淫」^{注4}——による表現である以上、もとより、儒教の考えにもとづいて、好色をいわば批判的にみなす立場にこの所伝もたつはずである。実際、「晝夜戲遊」をめぐって仕丁が「若太后不聞_レ看此事_二乎、靜遊幸行_一」という口吻は、太后が「此事」すなわち「晝夜戲遊」を知らないことの意外なおもいをそれとして素直に告げたものであるが、ここに、好色にたいする暗黙の批難を伏在させていることは明らかであろう。

四 太后の嫉妬

さて、天皇の好色に批判的な立場にたつ一方、太后についても、その天皇の好色にたいする対応を肯定する側に立ってはいない点、これはまたこれで注目し値する。この点をなお敷衍していえば、太后のえがきかたには、たぶんに誇張とかたよりがある。

一連の所伝の冒頭に「甚多^ニ嫉妬^ニ」といい、それをさらに具体的にあらわした「故、天皇所^レ使之妾者、不^レ得^レ臨^ニ宮中^ニ」。言立者、足母阿賀迦邇嫉妬」というのがまず第一。そのなかの「言立」は、天皇の使う妾は宮中に足をふみ入れることもできないという前文をうけて、その妾の話し声がするというほどの意をあらわすであらう。^注宮中はここでは後宮に等しく、後宮に妾の話し声がするだけで、太后は、もう足をばたきさせて嫉妬をあらわにするということである。これが、太后の人となり・性格を規定したところの、所伝のうえでは、いわば総序にあたる。

すさまじいまでの太后の嫉妬は、以下には、所伝の具体的な展開のなかで、その場面に応じたかたちをとってあらわれる。まず黒日売にかんするくだりでは、彼女が太后の嫉妬を畏れて故郷に帰るさい、天皇はその黒日売を愛惜する歌をうたうが、太后は、その歌をきいて「大忿、遣^ニ人於大浦^ニ」^{（船から）}追下而自^レ歩追去」とある。嫉妬が忿怒にたちをかえて、黒日売に対する理不尽なまでのしうちに出る。嫉妬をめぐる誇張とかたよりの、これは第二である。第三は、八田若郎女にかんするくだりで、天皇の八田若郎女との「晝夜戲遊」を聞き知って「大恨怒、載^ニ其御船^ニ之御綱柏者、悉投^ニ棄於海^ニ」とあるのがそれである。第二と同様、嫉妬は忿怒にかたちをかえてあらわれるが、このばあい、相手に対するしうちではなく、自暴自棄の衝動的なふるまいにおよぶ点に特徴がある。

こうして所伝の冒頭にいう「甚多^ニ嫉妬^ニ」は、つねに忿怒にかたちをかえてあらわれるといったかたよりをみせる。なおまた、その冒頭の嫉妬を具体的に敷衍したなかに、天皇の使う妾の声がするだけで、体でその嫉妬をあらわにするといった、後宮から天皇の寵愛をうける女性をすべて排除しようとする太后の、まさに異常なまでの姿をえがくが、以下の所伝の展開でも、それをそのままひきついで、天皇の寵愛をうける女性は、これをどこまでも許さないすさまじいまでの忿怒をあらわす。そこに、あきらかに誇張がある。太后について、その嫉妬に限って、それをたぶん誇張してえがくこのえがきかたは、天皇についての、その好色を強調するえがき方に通じる。いいか

えれば、天皇の好色と大后の嫉妬とがあいたぐう二つの柱となって、これを基軸に所伝が展開するということにほかならない。

ところで、天皇の好色については、それを強調する表現が漢籍に散見する類型にあてはまるほか、それに対する批判的な見方も、儒教の考えにもとづく。一方の嫉妬もまた、好色とないあわせの關係にあるというそのそもそのありかたと、さらには、後宮をみずからもっぱらにしようとする者の、その強い意志の発現という所伝におけるそのあらわれとのふたつながら、漢籍のなかに類例がある。もっとも、前者は、一般的にも男と女にそれぞれ固有の性質によるであらう。たとえば、『顔氏家訓』では、次のように指摘する。

凡庸之性、後夫多寵_二前夫之孤_一、後妻必虐_二前妻之子_一。非_レ唯婦人懷_二嫉妬之情_一、丈夫有_二沈惑之僻_一、亦事勢使_二之然_一也。(卷上「後娶第四」)

この傍線を付したところという男と女のありかたを實際に地でゆくものとして、歴史には、漢の成帝と趙姉妹との例が名高い。『漢書』(卷十)の成帝紀の「贊」では、帝の人となりやその政治を称えたあとに「然_レ湛_二于酒色_一、趙氏亂_レ内」という。この趙姉妹については「外戚傳」(第六十七下)に詳しいが、彼女らの嫉妬深さを、そこに「趙氏姉弟驕妬」という。

男の好色と女の嫉妬とは、それぞれ男女の性質にねざすだけに、かくないあわせのかたちでしばしばあらわれる。所伝もそのかたちをとるけれども、内容のうえでは、『妬記』が伝えるいくつかの話に基本的な点で共通する。まずは話の冒頭の部分、

(一)妬記曰、王丞相曹夫人、性甚忌。禁_二制丞相、不_レ得_レ有_二侍御_一。時_二有_二妍少_一、必加_二諂責_一。『芸文類聚』卷三十五「妬」]

(二)又曰、泰元中、有_レ人姓_レ荀。婦庾氏、大妬忌。凡無_レ鬚人、不_レ得_レ入_レ門。送_レ書之人、若以_レ手近_レ荀手、無_レ不_レ痛打。客若共_レ牀坐、亦賓主俱敗。(同右)

右の二例ともに、夫人の嫉妬深さを強調したうえで、ひきつづいてその嫉妬をめぐる具体的な内容をあらわす。夫が他の女性を近づけようとするのを断じて許さないというのが、その内容である。『妬記』所載の話のなかには、ほかにもこの型をふむ例がある。『古事記』の所伝が、その冒頭において大后の嫉妬深さを強調し、そのうえで、これを敷衍するかたちで、わずかでも妾の声がするだけで、もうからだ全体で嫉妬をあらわにするというように説きおよびるのは、『妬記』にみられる類型にあてはまる。なおまた、『妬記』には、夫人の嫉妬深さを、その攻撃的な面にそくしてものがたる話をいくつか伝える。これまた一つの類型とみることができる。たとえば、右掲(一)の引用したなかに「無_レ不_レ痛打」「賓主俱敗」とあるほか、ここには、夫人が嫉妬のあまり攻撃的に出たために、かえって二度までもさんざんに杖でうちすえられるが、それでも「亦無_レ改悔」といった、いくぶん笑話がかった話を伝える。一方、右掲の(二)においては、引用したあとに「王公不_レ能_レ久堪、乃密營_レ別館。衆妾羅列、男女成_レ行」と続き、この子供が王公の所生であると知ったところで、夫人の攻撃的な行為を次のように伝える。

(一)曹氏驚恚、不_レ能_レ自忍、乃命駕_レ車、將_レ黃門及婢二十人、持_レ食刀、欲_レ自出_レ尋討。(同前)

怒りかられて、衆をひきつれ攻撃に出るという点は、同じ『妬記』所載の次の例でも同様である。註7

(二)妬記曰、桓大司馬以_レ李勢女_レ爲_レ妾。桓妻南郡主(郡主兄妬、不_レ即知_レ之、後知)、拔_レ刀率_レ數十婢、往_レ李所、因欲_レ斫_レ之。(『芸文類聚』卷十八「美婦人」)

嫉妬が攻撃的なかたちをとる例は、ほかにたとえば(『魏志』)又曰、袁紹婦劉氏、甚妬。紹死未_レ殯、寵妾五人、劉盡殺_レ之、又毀_レ其形。(『芸文類聚』卷三十五「妬」)などという凄惨なものまである。嫉妬が忿怒や憎悪などにかた

ちをかえ、相手の女性に対する攻撃的な行為となつてあらわれやすいことを、これらの例はあきらかに示唆するであらう。

『古事記』の所伝では、太后は、黒日売を愛惜する天皇の歌をきいて、「大忿、遣^二人於大浦^一、追下而自^レ步追去」という容赦ないしうちを加える。忿怒に発したその攻撃的な行動は、右に取りあげたいくつかの例に通じ、その一例としてゆうに並びうる。一方、八田若郎女をめぐるくだりでは、天皇が彼女を「婚^{めと}」り「晝夜戲遊」すると聞くや、太后は、「大恨怒、載^二其御船^一之御綱柏者、悉投^二棄於海^一」という怒りにまかせた衝動的なふるまいに及び、はては、天皇のいる宮中をさせてそのまま山代へはしる。攻撃というかたちをとらないけれども、天皇からの離反という、この意志的な、それこそ思いきった行動は、かたちをかえれば攻撃に容易に転じるはずである。これはまたこれで、さきの例に準じて捉えることができる。

かくて、『妬記』が伝える話のなから、そのいくつかに共通する項目をとり出して、それらを類型化してみると、基本的に、『古事記』の所伝の嫉妬ものがたる部分は、ほぼその類型にあてはまる。所伝の冒頭にしても、いきなり嫉妬深さを強調するその書きだしは、やはり類型にあてはまる。これら類型との一致を偶然の結果とみる余地はない。漢籍にまなんだ知識、『妬記』はその具体的な例であるが、それをふまえてなりたっているというのが、恐らくその実態であつたらう。

五 黒日売と神仙

ところで、天皇の淫楽はもとより、太后の嫉妬にしても、令ではそれを「七出^{注8}」の一つにあげるとおり、儒教の

社会では、どのみち容認されるはずがない。あまつさえ、天皇の淫楽を強調する一方、これとあいたぐう大后の嫉妬の、忿怒となってあらわれるそのすさまじさをえがくのであるから、『妬記』所収の話のなかにもそうあるように、悲劇的な結末をそのうちに伏在させているとみななければならない。それがやがて顕在化するきざしをみせたところで、臣下の懸命な活躍があり、破局を回避し、かつまた和解を暗示して、ひとまず幕をとじる。この一連の展開には、あきらかに作為がある。ここに作為とは、漢籍の知識をもとに、あるいは参与させて所伝をなりたせること、いわば所伝への応用をいう。前述のとおり、天皇の淫楽と大后の嫉妬には、確実にその作為がはたらいているとみなしうるが、さらには、この所伝の柱の一つともいふべき臣下の活躍にもそれは及んでいる。^{注9}さて、この一連の展開のなかにあつて、作為をはたらかせていることのそれとあきらかな例を、次にもう一つとりあげてみる。文芸的な性格がなかなか色濃いが、

乃自^レ其嶋傳而幸^二行吉備國^一。爾黒日賣、令^レ大^三坐其國之山方地^二而獻^二大御飯^一。於^レ是、爲^レ煮^二大御羹^一、採^二其地之菰菜^一。時、天皇、到^二坐其嬬子之採^レ菰處^一、歌曰、

山がたに蒔ける菰も吉備人と共にし採めば楽しくもあるか（下3ウ）

これは、大后の嫉妬を畏れて本国に逃げかえった黒日売と、そのあとを追ってわざわざ彼女のもとをおとずれた天皇とのおうせのくだりである。このおうせの場では、黒日売を「嬬子」といいかえる。このいいかえは、唐突ではあるけれども、もちろん異例ではない。同じように、実名がありながら「嬬子」といいかえる女性には、「伊須氣余理比売」「三野国造の祖大根王の女、兄比売、弟比売」（其容姿麗美）「宮主矢河枝比売」（麗美嬬子）「髪長比売」（其顔麗美）「伊豆志袁登売」「詞良比売」「菟田首等の女、大魚」（将^レ婚之美人）などで、いずれも求婚の相手であつて、その大半に、カッコ内に示すとおり、美麗という表現がともなう。これ以外の例でも、たとえば女装した倭

建命をみて熊曾建が「見_ニ感其嬖子_一」というように一目惚れしたというほか、応神天皇条に伝える天日矛伝承のなかでは、玉が「化_ニ美麗嬖子_一」とあり、また雄略天皇が吉野川の浜で出あつて結婚した童女を「嬖子」といいかえるが、この女性を「其形姿美麗」という。

「嬖子」のこの使いかたは、なにも『古事記』に限らない。『萬葉集』では「娘子」を使うが、これは「嬖子」に等しく、実際に同一女性をその二つの語であらわすうえに、さらにこれを「美人」という、『古事記』の先掲「大魚」にかような例がある。すなわち、二二八番の題詞（引用は、塙書房刊『萬葉集』本文篇による。以下も同じ）に、和銅四年歲次_ニ辛亥_一、河邊宮人、姫嶋松原見_ニ嬖子_一屍_一、悲嘆作歌二首

右のようにいう「嬖子屍」を、四三四番の題詞および左注で、

（題詞）和銅四年辛亥、河邊宮人、見_ニ姫嶋松原美人_一屍_一、哀働作歌四首

（四首略）

（左注）右案、年紀并所處及娘子屍作歌人名、已見_レ上也。但歌辭相違、是非難_レ別。因以累_ニ載於茲次_一焉。

右のように「美人屍」「娘子屍」という。「嬖子」「娘子」「美人」は、かくてたがい互用しうる關係にある。

『萬葉集』にも通じる「嬖子」の使いかたは、この語を使う黒日売のくだりを、いわば美しい女性をめぐる恋のものがたりとして設定していたとみるうえに、少くともその一つの拠りどころとなるであろう。内容また、そうした恋のものがたりとしての仮構性を示唆する。具体的に、黒日売をその郷里にたずねた天皇を迎え、これに「大御飯」をたてまつるのは、黒日売自身である。これは、矢河枝比売をみそめた応神天皇が求婚のため彼女の家をおとずれたさい、父の丸迹の比布礼能意富美が比売に「大御酒盞」をたてまつらせたという例、あるいは垂仁天皇条に伝える本牟知和氣王の所伝で、王が出雲をおとずれたさい、出雲国造の祖の岐比佐都美が「大御食」をたてまつら

せたという例などの、いわば服属象徴的な儀礼行為とは、その性格をまったく異にする。なにせ、黒日売という嬪子は、天皇にたてまつる「大御食」の、その「大御羹」の材料の菰をみずから採むのである。みずからを恋してわざわざやってきた天皇をもてなす、それこそやさしい女性の思いやりが、そこにはある。

さて、そのくだりの山場は、菰を採む嬪子のもとに天皇がいたる場面である。その舞台を、ことに「山方地」とする。地方豪族の女とはいえ、嬪子である女性が、「山方地」に、若菜ならぬ菰を、それもひとりで採むということ、その上、さらに天皇がこの女性のもとにいたるというこの設定は、尋常ではない。ここにはなにかあるはずであるが、いま考えうるのは、この設定が『萬葉集』に伝える竹取翁の所伝に通じることである。三七九一番の詞書きとして伝えるその所伝は、次のようにはじまる。

昔有_二老翁_一。号曰_二竹取翁_一也。此翁、季春之月、登_レ丘遠望、忽值_二表_レ羹之九箇女子_一也。百嬌無_レ儔、花容無_レ止。
于_レ時、娘子等呼_二老翁_一、嗤曰、

このあと娘子和老翁とのやりとりがあつて歌につづくが、詞書きの全体をとおして『遊仙窟』の影響が著しい。^{注10}まず、右のはじめの部分は、「從來遶_二四邊_一、忽逢_二兩箇神仙_一、眉上冬天出_レ柳、頬中旱地生_レ蓮」をかり、娘子の美容の描写は、「華容婀娜、天上無_レ儔、玉體逶迤、人間少_レ匹」(千嬌百媚、造次無_二可比方_一)による。このほか娘子和老翁とのやりとりのなかにも、それと指摘しうる借用がある。そのなかの一つに、

非慮之外、偶逢_二神仙_一、迷惑之心、無_二敢所_レ禁。

右の、これは「忽遇_二神仙_一、不_レ勝_二迷亂_一」あるいは「見_レ面、精神更迷惑」にもとづく例であるが、ここに示唆するのとおり、この竹取翁の所伝を、すくなくとも詞書きの限りは、『遊仙窟』にならない、神仙との出会いをめぐる所伝としてあげていることは明らかであろう。

『遊仙窟』は、作者張文成が、みずからの体験記といったかたちで、神仙と出会い、一晚を共にしたのち別れるまでの一部始終を詳細にものがたる。この『遊仙窟』を、右の竹取翁の所伝と同じ程度に、もしくはそれ以上に利用した詞書きに「遊_二於松浦河_一序」(『萬葉集』853番)がある。これは、次のような書きだしで始まる。

余以暫往_二松浦縣_一追遙、聊臨_二玉嶋之潭_一遊覽、忽值_二釣_レ魚女子等_一也。花容無_レ雙、光儀無_レ匹。開_二柳葉於眉中_一、發_二桃花於頰上_一。意氣浚_レ雲、風流絶_レ世。僕問曰、誰_レ鄉誰家兒等、若疑神仙者乎。

右の最後に「若疑神仙者乎」というとおり、これも、全体の構成上、やはり神仙との出会いをめぐる所伝といったかたちをとる。しかもなお、これは、別離まで含む。竹取翁の所伝にしても、右の「遊_二於松浦河_一序」にしても、詞書きという制約があるとはいえ、神仙世界のそのありかたは、むしろ神仙味に乏しく、素朴というほかない。神仙と目する女性にして、ただか「責_レ羹之九箇女子」「釣_レ魚女子等」といった有様である。けれども、これが実態である。

素朴にすぎる憾みは、『古事記』の所伝にしてもやはり禁じえないが、さきに指摘したように、舞台を人ざとはなれたとおぼしき「山方地」に設定し、天皇がここに菰をつむ嬢子のもとにいたり、二人のつかの間の感興をものがたるという、この筋だては、二つの詞書きに並び、それらを介して『遊仙窟』に通じるほか、またあるいは、曹植が、みずからの体験として神仙の女性との出会い・別離の顛末をものがたる——『遊仙窟』と基本的な筋だてを等しくする——「洛神賦」(『文選』第十九卷)にもつながるであろう。「洛神賦」では、神仙の女性との出会いを「睹_二麗人于巖之畔_一」と伝えるが、この女性は、神仙にふさわしく「攘_二皓腕於神澗_一兮、采_二湍瀨之玄芝_一」^{注11}というように玄芝を採る。菰をつむ嬢子という設定は、これに類縁をもつ。

神仙の所伝とのつながりは、おのずから天皇と黒日売との別離にまでおよぶ。さてそのくだりであるが、

天皇上幸之時、黒日賣獻「御歌」曰、

倭方^{やまとへ}に西風^{にし}吹き上げて雲離れ退き居^そりとも我忘れぬや

右のように黒日売が献った歌を「御歌」という点をめぐって、かかる「御」の使用を不審とし、宜長の衍学説をいまでもおおかた踏襲する。もともと、一方に「黒日売に『御歌』と敬語をつけているのは、この歌が吉備の海部直の側の伝承によるため^{注12}」という見方もあるが、この見方は、そのうちになおいつそう困難な問題をかかえている。

「御歌」という以上、そしてここに本文の異同がない限りは、これをそのまま受けとるのが筋である。「御歌」とは、つまり、天皇の御製歌にはかならない。歌の内容のうえでも、たとえば宣長が「倭方と云るは、天皇の京へ還り坐スところをもこめたるべし、」(さて此ノ句の意、天皇還リ上リ幸して今より京と吉備ノ国とに、遠放りて居りともと云るなり)、『古事記傳』三十五)と説くところ、「退き居る」主体は、西風が吹きあげて、雲が離れるように遠く天のあなたにへだたってしまう者、すなわち天皇で、その天皇が、天をへだてて遠く離れていても、残した黒日売を忘れないという惜別の情をうたった歌とみることができる。げんに、この「御歌」を、黒日売は献じたにすぎない。黒日売の作歌は、「御歌」につづく次の歌である。

又歌曰、

倭方に往くは誰が夫^{つま}こもりづの下よ延へつつ往くは誰が夫

「御歌」をうけて、あきらかにそれに照応する内容である。「こもりづの下よ延へつつ」は、「御歌」に離れ去るみずからの形象としてよむ天上の雲に對して、地中ふかくひそかに流れる水を對置したもの、「御歌」の、風のため「雲離れ」を余儀なくさせられるというこれはいわば天皇の弁疏を、「こもりづ」の人目をしのぶ帰還として、つまりは、大后を欺いてやってきたがために、帰途でもそれとしられることを恐れはばかる怯懦としてやゆしたものの

にほかならない。

「御歌」をかく天皇の御製歌とみれば、これにさきだつ「山がたに」の歌との内容のうえでの類縁、すなわち、恋にうつつをぬかす男の楽天からうたった彼此の連続性や、これとかわだつて異質な黒日売の作歌との対応などの、歌相互の関係がおのずから明らかとなるであろう。なおまた、この「御歌」は、黒日売との別れにさいしての歌であるはずで、その点もふくめ、内容のうえでも、『遊仙窟』において、作者が神仙の女性、十娘との別れにさいして詠じたものとして伝える次の詩に通じる。^{注13}

下官詠曰、

人去悠悠隔_二兩天_一、未_レ審_二迢迢度_二幾年_一

縱使身遊_二萬里外_一終歸意在_二十娘邊_一

この詩にいう別離の天をへだてるはるけさは、「御歌」の雲離れて倭と吉備とにへだたるそのはるけさに通じ、またそうしてへだたつていても、その別れた女性をどこまでも心にかけるといふ、ほぼ同じ内容をあらわす。

黒日売との別離も、こうして神仙との別離をほうふつとさせる。この展開にそくして「黒日賣獻_二御歌_一」を捉えるならば、「獻歌」は、ほかに若干その例があつて、これはこれで問題があるにせよ、このばあい、別れにさいして歌を献るということであるから、神仙の女性が別れゆく男になにか記念の品を与えるという、神仙の所伝にしばしばみられるかたちにあてはまる。『列仙傳』（卷上「江妃二女」）所収の鄭交甫の所伝では、それを次のように伝える。ここには、便宜、『文選』の李善注が引くその所伝をしめす。

神仙傳曰、切仙一出、遊_二於江濱_一、逢_二鄭交甫_一。交甫不_レ知_二何人_一也。目而挑_レ之。女遂解_レ佩與_レ之。交甫行數步、空_レ懷無_レ佩。女亦不_レ見。（『文選』「洛神賦」「感_二交甫之弃_レ言_一」の注）

この「交甫佩」は、『懷風藻』所載の左大史荊助仁の詩にも「誰知交甫佩、留客令忘歸」(五言・詠美人)とみえる。また、右の鄭交甫の所伝をふまえる『文選』「洛神賦」では、河洛の女神が別れにさいして献った品を「明璫」とする。その一節を次にしめす。

(女神) 悼良會之永絶兮、哀一逝而異郷、無微情以効愛兮、獻江南之明璫。(神の居処) 雖潜處於太陰、長寄心於君王。

この直後に、神女は、「忽不悟其所舍、悵神宵而蔽光」というように忽然とその姿を消してしまう。鄭交甫の所伝と基本的にはほぼ同じかたちをとるが、これら神仙が別れにさいして記念の品を与えるという筋立ては、『丹後国風土記』(逸文)が伝える浦島子伝にも通じる。浦島子伝では、神女が授ける品は「玉匣」である。

右のように神仙の所伝のいくつかあげた例に、くだんの黒日売との別れのくだりは、あきらかにつらなる。それは、彼女との永訣を暗示すべくたくさん趣向であつたろう。「御歌」にしても、額面どおり天皇の御製歌とみれば、それをそのままみずからの惜別の情をこめた記念として献るという、そうしたいわばおもてむきの意とは別に、歌を作った当の天皇にその歌をそのまま返してしまふという、内実は、天皇に対する痛烈な皮肉の意をあらわしたものとみることが出来る。この皮肉をそれとしてかたちにあらわして詠んだ歌が、「御歌」につづく「こもりづの下よ延へつつ往くは誰が夫」という歌である。黒日売の心情については、恐らくは意図的に、これまでずっと伏せたままで所伝は展開してきたが、この最後のくだりで、結局は太后のもとに戻ってしまう天皇の、その太后の目をおそれてひそかに帰るさまを、それこそたつぷり皮肉の歌を通して明らかにする。太后の嫉妬ゆえに里帰りを余儀なくさせられたが、そのおり、天皇は、ただ手をこまねく傍観者であつた。いままたおうせもつかの間、太后をはばかりてであらう、天皇は、人目をしのんでそのもとに帰ろうとする。黒日売の歌は、その皮肉にもかかわらず、い

かにも抑制がきいている。

六 まとめ

天皇の好色と大后の嫉妬とがないあわさり、所伝は、これを軸に展開する。好色も、また嫉妬にしても、そのえがきかたにはたぶんに誇張があり、各くだりのそのあらわれは、漢籍に散見する所伝の類型にあてはまる。そこには、また、それら好色・嫉妬を批判的にみなす儒教の考えが著しい。一方、黒日壳をめぐるくだりは、所伝の一連の展開のはじめに位置するが、この文芸的な性格の色濃い箇条には、その構成や内容にわたる神仙の所伝との類縁をみることができる。

ここに結論をいえば、いずれも、漢籍の知識をもとに、ないしそれをふまえてなりたっているというのがそのあらましである。同じなりたちを、すでに別稿において、この仁徳天皇条の冒頭に位置する所伝の、課役の免除によって人々を救済するというそのありかたを通してみたが、かれからこれへと流れる所伝のそのなりたちにおいて、二つは、ひっきり、一つであったということにはほかならない。

このことは、漢籍の知識が所伝の成りたちに深くかわること、これが仁徳天皇条の一連の所伝の基調であったことを示唆するであろう。その基調は、げんに、黒日壳につづいて天皇が恋の相手とする―所伝では、大后の不在に乗じて結婚すると伝える―八田若郎女をめぐるくだりやそれ以降にも、それとしてあきらかなあらわれをみせる。その逐一の検討や、それらを通して『古事記』のなりたちを考えるためには、もはや稿をあらためなければならぬ。小稿は、それへの橋渡しの意味をあわせもつ。

〔注〕

- 1 「『古事記』のなりたちと漢籍——仁徳天皇条の所伝をめぐって、その(一)——」『佛教大學研究紀要』通巻七十二号
- 2 本文は、検索の便宜にしたがい、高木市之助・富山民蔵編『古事記總索引』本文篇による。丁数も、それによって表示する。
- 3 「婚」とは、たとえばこの八田若郎女のとに登場する女鳥王のばあいに「天皇以其弟速総別王、爲媒而乞庶妹女鳥王」とあるように、本来、仲人をたてる。唐律(『唐律疏議』卷第十三「戸婚」)の疏議では、これについて「疏議曰、爲婚之法、必有行媒」と明記する。これは、ふるくさかのほつても同様で、「媒」を欠くばあい、たとえば『毛詩』召南「野有死麋」の詩序に「無禮」といい、この鄭注に「無礼者、爲不由媒妁、鴈幣不致、劫脅以成也昏。謂紂之世」と説く。
- 4 『藝文類聚』卷三十五「淫」所収のなかには、たとえば「列子曰、鄭公孫穆好色、後庭數十、皆擇稚齒於後庭、以書足夜、三月一出。」という極端な例まである。
- 5 『萬葉集』には「春去ればまづ鳴く鳥の駕の事先立ち君を待たむ」(935番)という歌がある。
- 6 『妬記』がいかなる書物であったのか詳らかではない。

『古事記』の所伝のなりたちと漢籍

- 『隋書』卷三十三「經籍志」(史部)には「妬記二卷、虞通之撰」とあり、『舊唐書』「經籍志」には所見なく、『唐書』「藝文志」に「妬記二卷」とみえる。
- 7 『世說新語』「賢媛第十九」にも、この話を伝えるが、辭句その他に少く違いがある。劉孝標の注には『妬記』の所伝を伝える。それも『藝文類聚』と若干字句を違える。
- 8 儒教の支配的な社会にあつては、嫉妬は許されない。令(『戸令第九』)では、妻を離別する要件として「七出」を定めるが、そのうちの一つに「六、妬忌をあげる(唐令、日本令ともに同じ。『唐令拾遺』、岩波日本思想大系「律令」)律(『唐律疏議』卷第十四「戸婚」)には、「七出」によらずに棄妻したばあいの罰則規定がある。なお『萬葉集』の詞書きにも「七出例云」(406番)とある。
- 9 『春秋左氏傳』「史記」淮南子『「戰國策」などに伝える申包胥あるいは勢冒勃蘇をめぐる所伝であるが、これについては稿を改めて論じる。
- 10 「竹取翁」の詞書きや次にあげる「遊於松浦河二序」などが『遊仙窟』を利用してゐることについては、すでに小島憲之先生『上代日本文學と中國文學』中(第七章・遊仙窟の投げた影)に指摘がある。
- 11 ここに文芝と菰との違いは、本質的なものではない。『萬葉集』の詞書きのように、素朴なかがたが神仙の所

伝を受容したなかでの一つの傾向であったが、なお菰との類縁という点では、たとえば「天台二女」の所伝においては、神仙の女性との出会いの一つの契機として、

劉晨・阮肇、入天台採藥、遠不得返。欲下山、以杯取水、見蕪菁葉流下。甚鮮妍。復有杯流下、有胡麻飯焉。乃相謂曰、此近人矣。遂渡山、出大溪。溪邊有二女子。色甚美。（『太平廣記』卷第六十一。この所伝の付記に「出神仙記。明鈔本作出搜神記」とある。）

右のように上流からながれ下る蕪菁の発見を伝える。

12 西宮一民氏校注、新潮日本古典集成『古事記』の当該条の頭注

13 小島憲之先生『上代日本文學と中國文學』上には、「記・紀ともに語句表現の上で直接に遊仙窟の影響を受けたか否かは頗る疑はしく、むしろ古事記と遊仙窟との関係は否定的とみるべきである。」（210頁）とある。

（文学部助教授）